

松本義三郎

總代

東京砂糖問屋組合

明治三十二年十月二十日

閣下

親展

行閣總理大臣伯爵大隈重信殿

行閣

東京 988 書留



林林敬啟

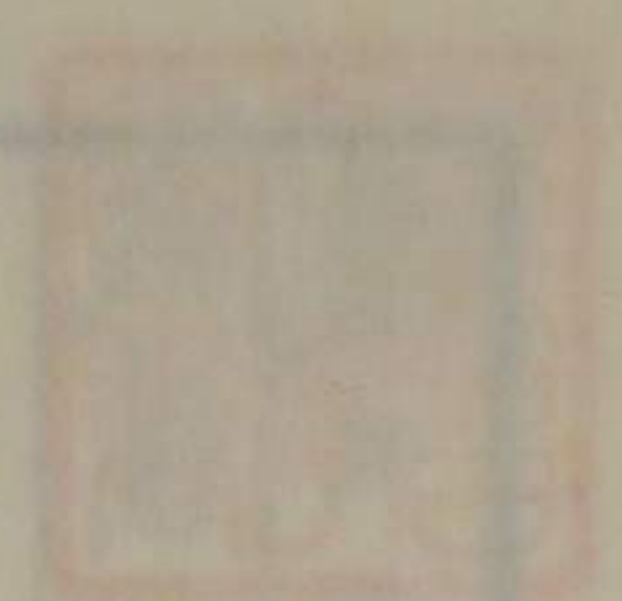
敬啟

民國二十一年十月二十一日

敬啟

敬啟

大亞細亞糖業公會



砂糖稅賦課對公請願書

砂糖稅賦課對公請願書

謹白凡一傳承之政府其於今日
ハシ力為之請願書
論之少國運之伸揚之隨伴也其國民
力有擔義務之增加大ニ必然ニ條
理ニ于何人ニ存之是認大ニ所



114
A 1957

砂糖税賦課ニ對スル請願書



砂糖税賦課ニ對スル請願

謹白 仄ニ傳承スルニ於テハ政府ニ於テハ今
回財政計畫ノ必要上歳入ノ不足ヲ補
ハシ力為メ諸種ノ財源ニ就テ調査セ
テレタリト抑モ洋ノ東西時ノ古今ニ
論ナク國運ノ伸暢ニ隨伴シテ其國民
力負擔義務ノ増加スベキハ必然ノ條
理ニシテ何人モ存シク是認スル所ナ

ルベシト重氏唯其租税賦課ノ方法ヲ
ル人民ノ苦痛ヲ少クシテ政府ノ收入
ヲ多クスルニ在リテ税目ノ少キト徴
收ノ手数ト費用ト少キヲ要シ比較的
ニ細民ニ輕ク富者ニ重ク收入ノ確策
アルヲ要ス道聽途説固ヨリ信ヲ措ク
ニ足ラスト重氏砂糖モ亦其新税目中
ニ在リト果ノ然ラハ當局者ハ如何ノ
成策カアル世界ノ傾向ハ却テ之ヲ保
護セント欲スルニ反シテ今日既ニ退

小舟三引製

歩シツ、アル我製糖業ニ課税セシト
スルニ於テハ余輩當業者ハ聊カ懸念
ナキ能ハス今少シク其事由ヲ開陳
以テ参考ニ資スルモアラハク
課税上ノ困難具身稅ノ方
砂糖税賦課ニ付キテハ當局者ハ如何
ナル方法ニ依ラシトスルカ今之ヲ策
ニ關稅ニ依リテ徵收スルモ事頗
ル簡易ナルカ如シト重氏締盟各國
向テ均シク之ヲ増徴スルニ通商條約

ニ於テ許サレルモノアリ於此乎政府
ハ内國糖ニ對シテハ三割ヲ課シ外國
糖ニ對シテハ輸入税ニ一割ヲ徵シタ
ル上更ニ内地取引商ノ手ニ入ルト同
時ニ三割ノ内國税ヲ賦課スルニアリ
ト聞ク此方法タル一見良好ノ方案タ
ルカ如キト金氏仔細ニ之カ觀察ヲ下
セハ事實ニ迂ナルヲ奈何ヤン今日英
通商條約議定書第四項ヲ觀レバ日本
國ニ於テ砂糖ハ課税スルノ場合ニ

小舟三引製

英國內國糖精糖ニ對シ其内國税ト同額
ニ増加スル所ノ關稅又課スルコトヲ
得ル規定アルニ依ラズヤ果ノ然ラ
ハ前頭ノ方法ニ依リテ徵收スルモノ
トセハ英國ハ果ノ之ヲ默過スハキカ
想フニ直ニ之レカ抗議ヲ申込来ルハ
必然ナリトス何トナレハ今後施行セ
ザルハ其稅關法ニ依リテ一割ヲ拂ヒ
タルモノガ更ニ其内地ニ於テ三割ノ
課稅ヲ受ケルモノトセハ事實ニ於テ

小舟三引製

四割ノ關稅ヲ課セラル、ト同一ナル
ニ依リ全然以約款ニ乖反スルヲ以テ
權利ト利益ノ上ニ於テ其打擊ヲ蒙ム
ルモノノ數カラサルニ依リ事理ニ敏ナ
ル英國國民力決シテ之ヲ雲烟過眼視ス
ルノ理ナケレハナリ然レ氏假ニ之レ
等ノ故障ヲ排スルトヤンモ其徵稅ノ
煩雜ナル殆シト名状スヘカラガルモ
ノアリ例之爰ニ一外人アリ規定ノ關
稅ヲ拂ヒテ現品ヲ引取り更ニ一日本

人ト結托ニ自己ノ雇人ト稱セシム各
地ニ販賣スルモノアラハ政府ハ徵稅
ノ手段頗ル困難ニシテ延ビテ多數ノ
稅品ヲ出スニ至ラン而シテ此種ノ
惡手段ヲ慣用シ巧ニ競争場裡ニ莅ム
モノアラハ正當ナル内國ノ糖業者ハ
到底失敗ヲ招クニ終ラシ而モ不幸ニ
シテ此稅案ノ遂行ヲ見ルニ至ラハ稅
國斯業ノ衰滅ヲ来スヤ必セリ豈ニ寒
心ノ極ナラスヤ矧ニヤ砂糖ノ種類又

ル十ヲ以テ數フルモ尚足ラサレヲ以
テ課税ノ標準ヲ定ムルニ困難ナルモ
ノアルニ於テオヤ而メ以ニ亦大ニ備
局者ノ警省ヲ乞ハント欲スルモノア
リ何ソ曰ク臺灣糖ニ對スル課税ノ方
法ナリトス今之ヲ便宜上同地方ニ限
リ今回ノ課税ヲ爲サストセシカ同島
モ亦版圖ノ一部タル以上ハ締盟各國
カ之ヲ不問ニ措カサレハ火ヲ親ル日
リ瞭カナリ然ラハ之ニ母國ト同一ナ

ル課税ヲ爲サレカ從來其産類ノ多ク
カ支那大陸ニ向テ輸出セラレ比律賓
瓜哇等ノ産糖ト競争セラ大ニ優勢ナ
ルモノ主トセテ其價格ノ低廉ナルニ
職由スルモノナラシメ今以突飛ナル増
税ノ爲メニ同島製糖ノ輸出ハ全ク杜
絶シ来ニ糖業ノ衰滅ヲ招クニ至ルヤ
必セリ今ヤ台湾ノ事實ニ憂慮スヘキ
モノ一ニシテ是ラス物産豐富ニシテ
歐米各國カ環視瞻望以美ナル島嶼ニ

垂涎ニツ、アルニ係ハラス比較的歳
入額ノ少ナルノ時ニ於テ今又以苛
重ノ税歛ノ為メニ同島主要ノ産業ヲ
萎菲セシムルニ至テハ國家經濟上打
撃ノ妙ナルモノト云フヲ得ニヤ
内地ノ糖業ヲ絶滅スル
砂糖ハ今日奢侈品ニ非ラスシテ塩ト
均シク人生欽クヘカラサル日用品ニ
シテ文運ノ進ムニ伴ヒ其消費ノ増加
スルキモノトス我國ニ於テモ亦比年

増加ニ乘リ今ヤ一ケ年三千余万圓ノ
消費額ヲ見ルニ至ル而シテ其大部分ハ
輸入ヲ仰ケリ是ニ於テカ現今漸ク精
糖業ノ興ルモノアルモ事業尙創始ニ
屬シ未タ充分ナル成績ナク僅カニ輸
入ノ一分ダモ防ク能ハス故ニ此際能
クハクシテハ政府ノ保護ニ依リ一層ノ
費達ヲ促カシ全ク輸入ヲ防遏セシ
吾人ノ期望スル所ナリ之ヲ固ク海外
各國又斯業ニ付キ充分ナル保護法

リト理ノ當サニ然ルベキモノナラシ
現時我國ニ輸入スル精糖ハ主トシテ
香港製ノモノニシテ該品ハ原料ヲ比
律賓及瓜哇其他ニ仰キ以テ精製シ之
レヲ輸入シ来ル然ルニ我國ノ如キハ
香港ニ比シテ全然原料ヲ他ニ仰ガ不
両カモ給水ノ石炭ヨリ高ク勞銀ノ不
廉ナル等製作上ノ不利益多キニ反シ
百事低廉ナルヲ以テ特殊ノ保護ナキ
ニ漸次輸入ヲ防遏スルヲ得ルハ期シ

テ待ツベキハ然ラズ將ニ疾
施セラレシトスル關稅法ニ依レハ輸
入精糖ニハ一割粗糖ニハ五分ヲ賦課
ストアリ依之觀之粗糖ヲ資料トシテ
精製業ニ從事スルモノニ在リテハ精
糖價格ト粗糖價格トノ差額ヲ奉ケテ
經費一切ヲ辦了スルモノトスルモ尚
五分ノ利益ヲ享有スベキノ理ナルヲ
以テ優ニ外糖ト輸贏ヲ争フヲ得テ益
口斯業ノ發伸ヲ促カニ斷然工業界裡

二雄視スルノ機運ニ遭遇セシトスル
 ノ秋ニ於テオヤ然ルニ科膏局者ハ以
 ノ如キ理義ノ明瞭ナルニ関ハラス左
 迄多カラシムル收入ヲ獲ンカ爲メニ新
 タニ而カモ突飛ナル苛重ナル増税ヲ
 徴シテ斯業ノ不振ヲ招キ益々輸入ノ
 過大ヲ来タシントスルハ實ニ國家百
 年ノ猷計ヲ謬ルモノニアラズレテ何
 ソヤ翻テ政府若シ精糖ニ而已賦課ス
 ルトセハ如何是亦大ニ憂フヘキノ事

小舟三才製

アリ何トナレハ然ルニ必然ノ結果
 トシテ粗糖ト精糖トノ兩者價格ノ差
 大ニ即チ実体的ニ精糖價格ノ暴騰ト
 ナルヲ以テ勢ヒ之レカ販路ノ沮塞ヲ
 来タシ從テ粗糖ノ輸入増加スルカ故
 ニ從來精糖ニ力ヲ分チタリシ外人ハ
 カヲ集注シテ粗糖ノ輸入ニ從事スル
 ニ至リ益價格ノ廉ナルモノヲ輸入セハ
 自然ノ結果目下ニ於テスラ内國ノ粗
 糖ハ輸入粗糖ニ比シテ價格ノ不廉ナ

ルヲ以テ數籌ヲ輸シ、アルニ由リ粗
糖ノ需要ハ茲ニ全ク輸入ヲ仰キ内國
ノ產糖者ハ絶滅ノ不幸ヲ見ルニ至ラン
加之獨リ精糖ニ而已課税スルトセハ類
似ノ精糖ヲ以テ粗糖ト稱シ、税ノ惡手段ヲ
運ラスモノアルニ至ラン例之砂糖ノ標本
タル和蘭十四番上十五番上ノ品質
及ヒ色澤ノ不判然ニシテ當業者スラ
一見之カ鑑識ニ苦ムモノナルヲ利用スル
カ若クハ全ク精糖ヲ或ル一種ノ作用ニ

小舟三引製

依リテ変色セシムル等ノ手段ヲ以テ
脱税ヲ計ルハ誠ニ易ク、タラシ耳果ノ
然ラハ政府ハ如何ナル手段ニ依リテ
之カ鑑識ヲ為スカ、疑ヒナキ能ハ
ス否ナ寧ろ鑑識ノ方法無シト云フモ過言
ニアラザルナリ
之ヲ要スルニ本税目ノ如キハ所謂消費税
ナルヲ以テ徒ラニ徵收ノ手段ト弊害トアリ
且ツ之レカ爲メニ痛苦ヲ感スルハ富者ニ
アラスニテ細民ナルト共ニ之レカ收入ノ見

辺モ亦不確ナルニ於テハ決シテ適當ノ財源
 ト謂フコト得ス我國ノ状態ニシテ財源ノ涸
 枯セハモノトセハ則チ已ム苟モ然ラサルニ
 於テハ何コトモ甚シラスノ如キ不當ノ課税ヲ
 ナサントスルカ茲ニ事情ヲ陳ベ當局閣下
 ノ賢察ヲ仰ク所以ナリ恐悚頓首

明治三十五年十月



東京砂糖問屋組合三十五名

總代 松本森之郎



小舟三引製

小林弥兵衛
 方波見平兵衛
 栗林幸助
 金子秀次郎
 原 藤吉
 内田得之助



辺モ亦不確ナル。於テハ決シテ適當ノ財源
 ト謂フコト得ズ。我國ノ扶徳ニシテ財源ノ
 枯セハモノ上セハ則チ已ム。爲メテ
 於テハ何ヲ甚シクテ斯ノ如ク不
 ナカントスルカ。茲ニ事ヲ由田部
 ノ觀察ヲ仰ク所以ナリ。

明治

三十二年十月

栗林幸

如

東京砂糖問合會會長栗林幸

總代 栗林幸

小舟三不製

